

第 146 回日本薬学会年会 参加報告

大阪医科薬科大学 薬物治療学I研究室

木谷 文香、水口 芹奈

・学会について

2026 年 3 月 26 日から 29 日にかけて関西大学 千里山キャンパスにて開催された第 146 回日本薬学会年会に参加いたしました。本年会は「ファーマシンフォニーが奏でる未来～やってみいひん？薬学イノベーション！～」をテーマとして開催され、薬学に関する基礎から臨床、創薬、医療応用まで幅広い分野の研究発表が行われていました。大学・医療機関を中心に多くの研究者・薬剤師が参加し、各会場において活発な議論が展開されていました。



・学会発表を終えて

＜木谷 文香＞

本学会において私は、「BCR-ABL チロシンキナーゼ阻害剤誘発肝障害発症機序の解明－反応性代謝物によるインフラマソーム活性化の検討－」というテーマでポスター発表を行いました。本研究では、BCR-ABL TKI による特異体質性副反応の発症機序に着目し、IL-1 β 産生および Caspase-1 活性を指標として免疫活性化の関与について検討しました。

発表中には、実際に TKI を臨床で使用されている薬剤師の先生方や、大学の研究者の方々からご質問やご意見をいただきました。臨床的な視点からの疑問点や解釈に触れることで、基礎研究だけでは得られない新たな視点を得ることができました。また、インフラマソーム依存経路と非依存経路の関与について議論を深めることができ、自身の研究内容の整理にもつながりました。

今回が初めてのポスター発表であり、また本研究も開始初年度であるため、十分に整理できていない点も多くありましたが、質疑応答を通じて現時点での課題や今後の検討事項を明確にすることができました。本学会への参加を通じて、多くの知見と今後の課題を明確にすることができ、大変有意義な経験となりました。今後は本研究をさらに発展させ、より詳細な機序解明に取り組んでいきたいと考えています。

＜水口 芹奈＞

私は、「ビルダグリプチンによるインフラマソーム活性化を介した肝障害の発症と免疫寛容損傷の影響」について口頭発表を行い、限られた時間内で研究の核心を簡潔に伝える難しさと重要性を再認識しました。質疑応答では、in vitro 実験系の詳細や DAMPs の寄与を直接的に証明するための実験手法について、機序の確実性を高める上で大変有意義なご助言をいただきました。さらに、基礎疾患などの背景因子が肝障害の発症リスクに与える影響につ

いてもご指摘をいただきました。薬剤単独の作用にとどまらず、より臨床に即した多角的な視点で評価する重要性を学び、自らの研究テーマに関する理解を深めました。

他の発表演題では、創薬や臨床における免疫毒性や特異体質性肝障害、生体模倣システムの現状など、医薬品の安全性評価に関するシンポジウムがありました。企業や大学などの研究者や専門家による最前線の研究に触れ、安全性評価においてヒトでの事象を再現する難しさや、それを克服するための新たな評価手法の確立について理解を深め、今後さらなる発展が求められる分野であると実感しました。また、幅広い分野のポスター発表や一般演題を通じて、異なる視点やアイデアに触れることで視野を広げるとともに、自身の研究における新たなアプローチの可能性を考えるきっかけとなりました。

本学会で得た知見は、自身の研究に対する理解をより一層深める貴重な機会となりました。この経験を活かし、今後の研究に取り組みたいと思います。